

第二次世界大戦後の日本は、勝戦国、特に米国の影響を受けて目覚ましい発展を遂げ、わずか約 20 年で世界第二の経済大国を築いた。一方、中国は 40 年以上日本に遅れたが、1978 年に中国の最高責任者となった鄧小平が共産主義経済から資本主義経済体制への経済システムの移行に重要な役割を果たしたため、1990 年代後半から著しく経済が向上し、「赤の資本主義」と呼ばれるようになり、不景気に直面した日本とは逆転した方向に向い始めた。自由市場のグローバル化が急速に進み、圧倒的に幅広い中国製品が市場に出回るようになった。現在、衣類や日用品などの中国製品は、米国市場の 50% 以上を占めている。中国が日本の GDP を追い抜いて、実質的に世界第二の経済大国になったことを米国のメディアが報じたのは今年に入ってからである。中国のアフリカへの投資や石油生産国との強力な外交関係など、中国の急速なグローバル化と経済成長が近年注目されるようになった。

近い将来中国が米国を追い越して世界第一の経済大国になるとみている米国民が増えている。今年 1 月のピュー・リサーチ・センターの世論調査によると、47% の米国人は、既に「中国が世界の経済をリードしている」と答えたのに対し、「米国が世界一」と答えた率はわずか 31% であった。また、58% の米国人が、中国との強力な外交関係を築くことの重要性を強調しており、米国が圧倒的に中国を経済面で意識していることが理解できる。中国との外交関係を重視しながらも「貿易や経済面では、米国は中国に厳しい姿勢であるべき」とする意見が 53% で、「中国の軍事力より、その経済成長の方が米国の脅威になる」と考える米国人は 60% に達した。

著しく豊かになった中国の若い世代は、経済の他に自国に対する理想があるのだろうか？ 西洋文化を強調し、日本の戦国時代のような群雄割拠政府に反抗した 20 世紀初期の新文化運動、領土権をめぐる 1919 年のヴェルサイユ条約に抗議した五四運動、民主化運動の機運が高まった天安門事件など、若者が先導した革命の歴史が色濃い中国では、欧米諸国の期待や思惑にたいし、戸惑いと複雑な思いが若い世代にあるようだ。法体制を含む民主主義の西洋原理を応用しない中国に対する西洋諸国の批判に、彼らはプレッシャーを感じている。しかし、中国の若者全てが、「西洋に追いつけ、追い越せ」を目標にひたすら奔走した戦後の日本と、中国の今の姿をオーバーラップさせて考えているとは思えない。CNN や CBS ラジオの記者であり、過去に数回、上海をはじめ中国の主な都市取材したアナンド・ギリドラアスは、昨年の夏、再度訪問した中国の各地で多くの若者に会い、彼らと多くを語った。その記録をアマゾン・ドット・カムが数年前開発したキンドルの電子書籍に *Chinese Dream* と題して、今年 1 月出版した。急激な経済発展と人口増加、公害、腐敗、工場のスラム化と自殺、ホームレス、未公開数の死刑執行など、近代化を目指す莫大な社会基盤構造プロジェクトの裏に潜む様々な問題を目前にしたギリドラアスは、学生、社会学者、芸術家、社会活動家、企業化、教育者な

ど、近年の中国経済の恩恵をうけている多くの中国人と出会い、若い世代が考える中国近代化の理想について取材した。

彼らの多くは、西洋からのコピーではなく、自らのアイディアを持つことで、「自国の土壌から根付いた天然の近代化」を理想としている。中国は、あやゆる文化が融合した多様な社会である。共産主義、社会主義、自由市場主義、儒教、プロテスタント教義などが混合して織り成した社会を築いている。中国の資本主義には、「毛沢東が残酷にそして危険なまでに、先代が引き継いできた過去の伝統を埋めようとしたように、結果を考慮することがない」ような歴史的背景がある。しかし、中国の若い世代が、さらに洗練された近代化を望んでいるとしても、彼らは「西洋の失敗と中国の方針」とを明白に区別している。中国は、「過去 300~400 年間、世界が西洋に求めたものとは本質的に異なる、人間的問題を中心にした組織作りを選択すべきである」と彼らは語る。西洋諸国が行きついた先は、止むところのない自由市場主義が生みだした経済格差、発展途上国で絶えることのない貧困、アフガニスタンやイラクでの戦争、世界的規模での経済崩壊であり、中国の若き知識階級がこのような結果を望んでいるわけではない。

ギリダラスは、新聞社の編集者、資本家、国際関係の学者など、ある知識階級が語った興味深い内容も紹介している。彼らの共通した意見には、「中国社会は既に行き過ぎた。外国の哲学、ヨーロッパの共産主義思想から米国の資本主義までを包含し、あるいは模倣してきた」とし、上海で著名なある新聞社の編集者は「今日の米国が明日の中国だ」と述べた。「近代化は、西洋社会がその基準を定め、中国は、その基準を受け入れるかどうかの選択に迫られ、人類発展の名目のもとに民主主義と人権、資本市場と英語力を競い、その競争で走り続けてきた。近代化は西洋がもたらしたものだ」と語り、彼らが望む近代化とは「中国人自らが理解し、西洋諸国も理解できる、違う類の近代化のアイディアを中国は持つ必要がある」と理想を伝えた。

もちろん、「大多数の中国人が、このような知識層の近代化の考え方に賛同しているわけではない」とギリダラスは述べている。その理由は、若者と彼らの親との世代間の相違があるからだ。中国社会の風潮には「調和と皮肉の二つの対照性がある」と述べている。「調和」は、テレビ局や企業のパンフレットに強調され、また 40 歳以上の中国人、小さな町村の住民らは、変化している自国にたいして批判せず、少なくとも表面上は「調和」を図ろうとする。親の世代は「自国を偶像化する。なぜなら彼らは中国人である」という意識が強いからであり、「自国、個人、家族の富を築いてくれたのは、彼らの先祖である革命のリーダー達である」と信じているからである。一方、都会で生まれ育った若い世代は、世相を嘲弄し、そのような「調和に反抗する」傾向があり、「政府の在り方に皮肉的」と述べている。その皮肉った態度は中国社会にある二つの主な勢力となっている「共産党、および個人の生活に重点をおく物質主義」に対し

て向けられる。特に、インターネットの世界では、中国語で皮肉った会話が多く見られるという。若い世代の「皮肉会話フォーラム」が構築され、「インターネットが紛れもなく武器になっている」と述べている。インターネット技術を駆使した近代化の波は、ビジネスの世界にも大きな影響を与えている。

例えば、レストランで、中国の伝統的食生活をほとんど知らず、西洋の食文化も充分知らない若い世代が作り出すメニューは、インターネットで収集したメニューの新しい材料に、中国伝統の食材を混合して、独自のメニューを生み出すレストランが増えており、中国純粋の伝統的レストランは減少しつつある。ギリダラスはこれを「ヒュージョン〔融合〕・レストラン」と名づけている。また、ファッション、時計やアクセサリーなどのビジネスにもヒュージョンの風潮がある。1970年代および80年代に生まれた世代は、幼少の頃経験した古い文化と、輸入された現在の西洋文化の違いを意識しながら、その両方を融合した生活様式を取り入れている。一方、懐古感を尊重するあまり「ナイキ化現象」から原産地の製品に戻るなど、「潮流に逆らって泳ごうとする」若者も存在する。

結論として、中国は、政治および経済的な側面で西洋文化を導入することに葛藤しながらも、「西洋とは全く異なった中国独自の文明」を生みだそうとしている。新しく変わりつつある社会で「超現代性と古い伝統を組み合わせるプロセス」として、「共産主義、資本主義、国家主義のプライドは、西洋文化とは異なったアイデアと更に劇的な全体構想に向けて融合」しようとしている。多様化した中国社会で、一部の知識人が中国独自の近代化を理想としていることは自然であり、世界の動きを冷観視し、情熱的に未来を語る中国の若い世代に着目する必要がある。しかし、中国の経済成長の一因には「不法の土地販売」や製造された玩具から基準以上の鉛が頻繁に検出されているなど、不条理な貿易慣行に基いた要素があげられる。中国製品が50%以上を占めるアメリカの市場で、欠陥製品の回収が毎年相次いでいる現状は、中国のビジネス原則に問題があることを示唆している。若い世代は、このような現実も鋭く指摘し、世界からの信頼を得ることも中国近代化の理想的な条件の一つとして論議してほしい。